

いつもと同じ日曜日だから、彼は寢癖も直さず、顔も洗わずに朝食を食べようとしていた。小さい時、勤勉な母から禁じられていたことだったが、今日くらいは破っても構わないと思つた。母は破つたら地獄に落ちると言つたり、蜂に刺されると言つたりしていたが、父は母がそうやって情操的な事柄について、口煩く叱責するのを不愉快に思つていたために、二人の間には喧嘩が絶えなかつた。父は結局宥めるために、その都度母の靴を脱がせて足を舐めまわしていた。母は満悦すると、そのまま一人でシャワーを浴びに行く。

郵便配達もないために、訪問者も無いだろうと思つていたから、服も寝巻きのままであつた。寝まきは黄緑にピンクの水玉というお気に入り柄で、他にも同じのを二着持っているのだが、洗わずにずっと同じのを着ていたために、汚れてお尻の部分に小さな穴があいている。但し、パンツさえ清潔であれば病氣には罹らないから、彼は至つて健康だ。

一瞬だが、夜寝る前に父が話してくれた挿話を、一つ思い出して不安になつた。それは母が言つていた教ある規則の中の一つの、「歯磨きしてからトイレへ行くこと」と、いうのを破つた人が父の知り合いにいたらしく、その人は歯磨きをせずにはトイレへは行ったために、甕の中から飛び出してきたコロ・モルという謎の生物に、首を抜かれたそうだ。コロ・モルは甕の中に住んでいて、その姿はその人物の肉体を模るらしいが、頭だけが無くなつており、糞便でその都度生成される。その生物は目撃証言が幾つもあるが、首を抜かれた人間が語ることもできず、一体誰が確認したのか判らないが、一つの説として抜かれた生首が語つたというのがある。しかしながらそれはあまり現実的ではないというので、最近では便所を覗いていた変態が偶々目撃したが、その衝撃で発狂して、樹の根に首を挟んで死んだ後に語り出した、という説が有力になつている。その人はどうやら一応彼とも面識があつたらしいが、彼は全く覚えていなかったため、全く可愛そうとは思わなかつた。

寝呆けも覚めておらず、未だ彼は夢心地なのか、コーンフレークに牛乳を入れるつもりで冷蔵庫を開けたのにもかかわらず、隣人の経産婦に夜這いした折に、乳繰り過ぎて嘔き出させてしまった母乳を溜めておいた瓶を、間違つて取り出してしまった。色も質も腐つて悪くなつてしまつていたのに、なんだかそちらのほうが美味しそうに思つたのかもしれない。実際一口食べてとても美味しかつたために、彼は残りも飲み干そうと思つていた。

ところが窓から入ってきた猫が漫ろに歩き、テーブルの上に飛び乗つた時に、古いテーブルは大きく揺れて瓶は倒れて落ちてしまつた。豪快な音をたてて碎け散り、薄い茶色と灰色の混ぜたような液体が床に飛び散つた。幸い床は石畳だつたため汚れずだが、猫はそれを舐めるなり大声で鳴き叫び、床を引っ掻き生爪を剥がしてしまい、手先から血を垂らしながら死んでしまつた。鳴き声の中に、野太い「許さないぞ」という脅し文句が聞こえた気もするが、それは猫に宿つていた浮浪者の魂の、断末魔の叫びだつたのだらう。

死体をとにかく裏山へ持つて行きたかつたので、朝食は食べ掛けであつたが、寝巻きか

ら作業着に着替えると、玄関先に止めてあったトラックのエンジンをかけた。気だるい日曜日の朝には、猫の死体は、手で運ぶには余りに重たいと思つたのだ。黒い排気ガスがマフラーから吹き出ると、砂煙が上がり、辺りを暗闇にしまった。どうやら粉塵が空高く上がり、雲を作つたようだ。今に大雨が降りそうだったから、土砂とともに流れてくれれば良いと思つて、いつの間にか紫色に変色していた猫の死骸を、家から少し離れた草叢へ放つた。どんどん不潔になつていくので、手で運ぼうと思わなくて良かったと思つたが、それも今となつては要らぬ安心であつた。蟻と蠅が一気に押し寄せてあつという間に真つ赤な肉を剥き出したため、朽ちていき解剖されていく過程を、手短に観察する絶好の機会と思つた。しかし一刻も早く家に帰らないと、大雨に流されるかもしれないから、彼は観察を諦めて家に帰ることにした。尤も彼には死体の朽ちる様を見る趣味はない。

近所の家々からはぞろぞろと人が出てきた。もう直ぐ牛馬の尿より臭いし汚い、大量の雨が降るというのに、皆口を開けて空の模様を伺つている。「雨は降りますかね」「いいや、降らんでしよう」「余りに急ですよ」「酒を飲んでもそんなに早く催すことはない」「神は酒など飲まぬ!」「血を啜るのは悪魔だが葡萄酒を飲むのは聖職者だろう」「それで雨はふるかしら」「降つたら俺は息子二人を奴隷商人に売り渡すよ」「ならあたしは孫娘を売りに旅へ出るよ」彼はその様子を見ている内に、何だか雨は降らず、何事も起きないのではないかと思ひ始めて、踵を返して浜へ向かつた。猫の死骸はもう骨だけになつていた。骨の周りの地面は真つ黒になつていて、夥しい量の蟻の死体があつた。蠅の死体はというと、まだ骨の周りを、ぶんぶん翅を鳴らして飛び交つている。

浜へ行くと、頭上では爽やかな風が雲を押し流して、雲間に隠れて居眠りしていた鳥や龍の寝顔を曝して、恥を掻かせていた。そのために怒つた龍の目は真つ赤に輝き、空には太陽が三つあるようだった。丁度全裸で泳いでいた少女が、陽射しが強くなつたため、深く潜つていくのが見えた。彼は衝動に任せ、追うように海に潜ると、中は群青色に発光する空間で、蒼玉の結晶に入り込んでしまつたようだった。魚を追つている彼女を追つていたら、いつの間にか海底に着いたようで、足を踏み込むとそこは流砂になつていた。吃驚して彼は大声をあげるが時既に遅し、彼は渦の中心に膝まで吸い込まれていた。彼女は音にならない声を、泡の様子から読み取り、彼を助けようと蛸を捕まえた。八本の内三本を片手に括り、彼の顔に向かつて投げた。蛸は吸い付き彼を確り捉えると、手ごたえを感じた彼女は、水面を指して足を掻き始める。彼女の足はしなやかに蠕動し、器用に腰をくねらせ素早く泳ぐ、その様は半人半魚のようであつた。

上には白い太陽の影が三つ浮かび、射し込む三筋の光が、水流のために絡み合つている様子が目に入った。彼女はその上昇、旋回を繰り返した。その都度小さな乳房は揺れ、未だ手付かずの小さな性器が露わになり、魚に突つかれるのも厭わず、肛門から微に空気が漏れ出ていた。その光景に彼はうっとりしていた。水面が近くなるにつれ、蛸は彼の口をこじ開け、喉の奥へ入つて行こうとした。いよいよ波間に顔を出し、砂浜へ上がると息は荒くなり深く息をするのに集中するために、蛸には油断して、易々とお腹の中への侵入を許し

てしまった。蛸が胃の中で暴れるので、腹部が無造作に波打ち赤く腫れあがった。こんな失態を見られてしまつて情けないと思ひ、彼女の方を振り向いて苦笑いを浮かべた。彼女は幅の広い海藻を、何枚も身体に巻き付けていたが、彼は何も身に着けておらず、体毛は海水で皮膚にべったりくっつき、性器はその雄々しさを潜めていた。蛸の暴走が苛烈な痛みを生じさせたため、彼は思わず膝を屈して倒れ込んだが、必死に痛みを堪える中にあつても、性器を露出していることに恥じらいがあり、悶絶し途切れ途切れとなつた言葉で彼女に、海藻を採つて来て欲しいと頼んだ。ところが彼女は砂を掴んで彼の顔に掛けると、そのままどこかに行つてしまつた。それは申し訳なさそうに断るときの作法であつたかどうか、彼には判断がつかなかつた。

彼女がいなくなつて、代わりに近所の主婦や子供が集まつてきた。いかなる狂態をも、控えめの嘲笑である微笑みをもつて見守るのが、この町の住民にとつての良心や優しさであつたのだ。誇大妄想やペテン、大袈裟な振る舞いに色情狂は、丁度良い見世物であつた。彼はますます全裸でいるのが恥ずかしくなり、早々に蛸との格闘にけりをつけて帰宅したと思つた。肉体は愈々本格的に蛸を追い出さんがために、腹筋を酷使して吐き出そうとくせになるような、あるいは口蓋を吸い尽くす吸盤が刺すような快感を齎すために、嗚咽と嚙下の繰り返りで吐き気を催しながらも、彼は肉体の意志に反して両手でグイグイ口に押し込むから、仕舞いに唇や頬が裂けてしまつた。傷口から滲み出る、沸き立つた若い血が蛸を茹で上げ真赤にしたが、蛸は浮かばれないと、見ていた人は皆悲しむのだった。

彼は醜くなつた自分の顔を、白く泡立つ小波の中から拾つた海藻で隠しながら、全裸のまま家に帰つた。近所ではもう噂が広がり、彼は家から出る事も出来そうになかつたので、扉を締め、鍵をかけ、幾晩も涙で海藻を潤した。そのおかげなのか、顔の傷はある朝痛みがなくなり、海藻を剥がしてみると、傷はすっかり治つていた。それは丁度次の日曜日の朝であつた。

彼は嬉しくなつて外に出て、新鮮な空気を思ひっきり吸い込み、肺の隅々にまで行きわたらせた。扉の直ぐそばの郵便受けには幾つかの請求書と、はみ出すほどの新聞が入つており、入り切らなかつた分は積んであつた。どうやら彼が家に引き籠つている間、外では激しい雷雨が続いていたが、住民は構わず普段の生活を続けていたため、何百人と流されて死んでしまつた上、田圃も畑も全て水没し、凶作に見舞われることになつたそうだ。しかし、その雨雲が山に懸かり始めてからは、雨脚も弱まり、反つて自然に形作られた水路を整備することが、可能となつた。隣町との取引を利用して大きく稼ぐことができる時期待たれ、多くの商人や農民、それから地元の政治家たちが投資して実現したものの、隣町もやはり大雨で壊滅しており、人は皆流されたか移住してしまい、もぬけの殻となつた町との間では何も運ぶものはなかつた。彼は自分の悲嘆の呻きで、耳の孔も気持ちも膨らみきつていたから、そんな惨事が起きていたことに全く気付かなかつた。

散々に泣いた後の彼は、その前に比べ少し老けたやうで、疲れで顔が浮腫んでいたし、

眼球は真赤に、眼窩は董色に染まり落ち窪んでいた。だからまず何か滋養をつけるものを食べて眠りたいと思った。そこで彼は電話を手に取り、行商人のテントのある、広場の公衆電話の番号を押した。誰が出るかは判らなかつたが、人口は然程多くなく、誰が出てもし誰なのかを判別するは可能である。すると出たのは偶然にも彼女であつた。唐突に鳴つた電話の受話器を取つたためだろう、「もしもし……？」と少し狼狽えた様子であつたが、彼には聞き覚えのある、それはもう蜂蜜のように愛おしく甘い女の声であつた。彼はとにかく空腹が甚だしく、睡魔と疲れが酷いため、何か食事を持って来て欲しいと伝えた。できれば行商人がアジアから持ち込んでいる、朝鮮人参や鼈を買つて来て欲しいと付け加え、金は後で払うと言つて電話を切つた。彼はもう受話器を持つていられたかつたし、立つているのも限界で、その場に萎えたように座り込んだ。

暫くして呼び鈴が鳴つた。しかし彼は意識が混濁としており、返事をしなかつた。そのために彼の名前を三回繰り返す声が出て、鍵が閉まつていない扉は開かれた。薄暗い家に入つてきたのは彼女であつた。白いノースリーブのシャツに、デニムのホットパンツだけの簡素な格好をしていたし、着けていた百合の香水も彼には心地よかつた。彼女は買つてきたものをテーブルに置くと、彼の名前を呼びながら辺りを見渡していたが、「ここだよ」と声を掛けると、気が付いた彼女は倒れている彼をまじまじと見つめ、眼を大きく開くなり、驚きのあまり家から飛び出してしまつた。その後隣の新婚夫妻を連れてきて、腹の大きい女と小柄な男がせつせと彼を外に運び出し、長く丈夫な枝ぶりを切り落としてきて、彼をそれにきつく縛りつけた。肉に食い込む紐の痛みに彼は眼が覚めた。砂浜まで運ばれている時、彼は奇妙な愉悦を感じていた。夫妻が深く杭を二本打ち込み、彼が括られている枝をそこに掛けた。彼女の髪は汗ばんだ皮膚にべったりとくっつき、玉の雫を幾つも垂らしていたが、その雫は顎先からシャツの隙間へ入り込み、胸元へ垂れ落ちていたため、シャツは汗が染みて透けていた。小さな乳首が小さな突起をつくりだしている。

頭の重みでぐるりと半回転して、地面を直視する姿勢になつた彼は、自分の臍の下に薪が重ねられていくのを見て、「君は僕を焼いてどうするつもりだい？」と聞いた。「そうね、国体に反逆して、焼身自殺によつて抗議を行った男として、マスコミに売るかしら」彼女はそつげなくそう言い放つと、ポケットに入つていた燐寸を取り出し、点火した。赤い焰を彼が恨めしげに見つめていると、彼女は訊いた。「あなた、最後に言い残すことはなかつた？」「特にあるわけでもないけど、僕はこの町を気に入つていたし、遠くにあるこの国を愛しているつてことかな」彼が自嘲的な笑みを浮かべてそう言うと、彼女は「そうね、良かった」と言つて抱擁と口一杯のキスをしてくれた。彼女の唇はキウイのように瑞々しく、長い舌は蛸より遙かに気持ち良かった。彼はぶら下がつたまま、彼女の唇を執拗に求め、彼女もその要求に応じて、ぶら下がつた彼をいたぶりながら、彼の日焼けした筋肉質の身体を愛撫した。彼女の唾液が日焼けした皮膚を微かに刺激し、彼は全身がくすぐつたかつた。その後彼らは何度もキスをして、一緒にシャワーを浴びて、母の言いつけ通り歯を磨いてからトイレに入り、海へ行つてセックスした。彼女は全身から体液を噴き出し、小麦

色に湿った砂浜には、椰子の芽が幾つも出た。酒を飲んでももう味気ないくらいだったし、行商人が売りに来る麻葉も煙草も、もう要らないと思った。そうして二人は一緒に暮らすことを誓ったのだ。

ところが、そのころ漁師が不漁続きの不満を晴らすために、遊説中であつた地元の政治家を殴殺するという事件が発生し、洪水での不作に怨嗟の声を募らせていた、貧農を迎合してそのまま労働運動に発展したため、俄かに町は騒然とした。誰もが町の広場に集つては政談に勤しみ、饗宴の中で自分の声に酔っていた。終盤には死体となつた政治家の肉体を、壇上に据えて、もう言葉を聴かないその物体に、罵詈雑言を浴びせかけて奮起している。挙句昂奮した一部の青年が、血も出ぬ死体にナイフを突きたてたり、死後浮腫んだ顔を殴りつけたり、青ざめた腹を蹴り上げたりするので、その政治家は恐らく塵となつて風に吹かれるまで、彼らに暴力を加えられることになりそうだ。

そういう訳で、彼と彼女は、その町で結婚式をすることもなく、二人で町を離れることにした。狂騒を尻目に彼と彼女は、裏山へ向かい、二年前に座礁したイギリスの客船と同じ大きさの葦船を編みあげた。大量の飼料と家畜を積み、塩漬けの豚肉や、野菜の鉢を幾つも積むと海に出た。白いテント生地を縫合して大きく広げると、風を孕んで膨らんだ。葦船だから帆が一つあれば順調に海面を滑る。晴天が続く、針路は風向きに任せるがままだ。

だいぶ陸から離れてもうその影すら見えなくなり、星の並びにも若干の変化が起きた頃、鰐を崇拜する民族の住む島に就いた。浜に上がると日が昇り、朝焼けの彼方から風が囁き、いつものように詩を詠んだ。それは鎮魂歌だった。何があつたのか気になつたが、その後暫く航海してデリー着いた頃、水路で大量発生した巨大な蛭の襲来で、故郷が壊滅したことを知った。住民が吸いつくされて間もなく、雲の上で居眠りしていた龍が目覚めて、あつという間に全て平らげたため、他の町には影響がなかつたようだ。彼女はその報せに無関心で、インド象の鼻に巻き取られて象の上に乗ると、赤い絨毯の心地よさに笑顔を浮かべていた。だから僕もそうすることにした。象の牙は美しく雄々しい、そんな牙が僕にも欲しいと思つた。彼女は耳が欲しいと言つたが、それには僕は反対した。彼女の顔の大きさには不釣り合いで、首を痛めてしまうと思つたのだ。「それにしてもここには草一本生えてないのね」、赤と黄色の乾燥した大地には植物は殆ど生えておらず、寧ろ放置された死体のほうが多く見かけられる。「進め」、彼が象の腹を蹴つて蛇の鞭で撃つと、嘶き鼻をくねらせた象は、生乾きの死体を踏みつぶしながら地平線上を辿る。風が吹き、この地の鎮魂歌を詠つた。それは聞いたこともない鎮魂歌であつたから、ともすれば遠い潮のざわめきに紛れてしまうようなものであつた。